



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第16主日 B年 (2021年7月18日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 23章1—6節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 2章13—18節

福音朗読：マルコによる福音 6章30—34節

テーマ：共苦きょうく

三つの朗読から

第一朗読の後半、「見よ、このような日くが来る」に心とを留めましょう。どのような日かという
と、次の行ぎょうにあるように、正しい若枝わかえだが起おこされ、国くにに正義せいぎと恵めぐみの業わざが行おこなわれる日のこと
です。毎日、同じような日くの繰かえり返しかえのように思いえて、なんとなく生きづらくて、しんどいわたした
ちむに向かって、「このような日くが来る」と神よげんしゃさまは預つう言かた者かたを通かたじて語かたりかけます。神よげんしゃさまの言葉
に信しんらい頼らいをおくことができたら幸しあわせです。

第二朗読の「キリストはおいでになりいんしやうてき」も印象いんしょうてき的な言葉ことばです。「キリストはおいでになり」とは
信しんこう仰こう共同どうごん体のなかにキリストが来たいけんられた体たいけん験けんを指さすのでしょうか？ あるいはミサせいさい聖せいさい祭さいにおける
キリストの現げんぞん存ぞんを指さすのでしょうか？ よくわかりません。しかし、主しゆイエス・キリストは来しゆられる
方かた、おいでになる方かたなのです。「主しゆよ、来いてください」と心いから祈いのれたらよいでしょう。

福音朗読はイエスさまが十二人の使徒しとたちを休やすませるところから始はじまります。「しばらく休やすむが
よい」の「休やすむ」はギリシア語でアナパウオーと言いいますが「体きゆうそくを休やす息そくさせる」の意い味のほかに
「元げんき気きづける」の意い味みもあります。イエスさまは使徒しとたちを「元げんき気きづける」ことかんがを考かんがえていたの
でしよう。しかし、人々ひとびとがそれをささえぎります。

説教

「休やすむ」はギリシア語でアナパウオーです。これは「体くわを休やす息そくさせる」という意い味みに加くわえて「真しん
実じつや喜よろこび、慰なぐさめを受けて、元げんき気きづけられる」という意い味みもあります(例：フィレ7章20節)。イ

エスさまは人里離れたところに使徒たちを連れていって、彼らに身体的にも精神的（霊的）にも休息をあたえながら、人々の願いに応えるための力を神から受けるために「元気づける」という意図を持っていたのでしょうか。事実、イエスさまご自身も人里離れたところで一人で祈ることはありました（1章35節参照）。

しかし、舟に乗って、自分たちだけで人里離れ所へ移動しようとするイエスさま一行の様子を、群衆は「見て」、「気づき」、「駆けつけ」ます。イエスさまを探し求める人びとの熱望が伝わります。

今度は、そんな群衆の様子をイエスさまが「見て」、「憐れ」に思い、「教え始め」ました。「飼い主のいない羊のような有り様」とありますが、羊は群れから離れて単独では生きていけません。羊飼いは群れを一つにまとめ、敵から守り、草のある場所へと導きます。この表現を用いながらイスラエルの宗教的な指導者がいない状態を描いていると思います。「深く憐れみ」はギリシア語はスプランクニゾウマイですが、これは「はらわた」スプランクノンから派生した動詞です。新約聖書のなかで十二回使われています。「目の前の人の苦しみを見たときに、こちらのはらわたが痛くなるほど、その人の苦しみがわかる」という意味です。共感といってよいでしょう。

「[イエスは] 大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有り様を深く憐れみ」（マコ6章34節）。この一節を心に留めたいものです。人は哀しみを生きます。この短い一節から哀しみにくれる人間のありさまと、イエスさまと使徒たちが見た大勢の群衆の有り様が重なって見えませんか？ 哀しみの中で、悲嘆に暮れる人々の姿を「飼い主のいない羊」という表現から思い描くことができます。憂いや、嘆きに苛まれ、切なさややるせなさで心がいっぱいになっているような人々の様子といったらよいでしょうか？

彼らは待ち続けていました。自分たちの哀しさに対して共感している人を。「深く憐れみ」は、イエスさまが相手に示す共感を表しています。哀しむ人々の様子を見て、ご自分も痛くなるくらい哀しまれる。こうして、イエスさまは共感します。共感どころか、「共苦」と言ってもよいかもしれませぬ。

